

川島整形外科病院
2021年度大分県1位の骨折治療数

脆弱性骨折 高齢化で増加

病院の実力

249

骨は、関節や筋肉などと共に体を支えている。骨折には様々な種類があり、部位や状態で治療も異なる。読売新聞は2022年12月23日、日本整形外科学会の専門医研修施設2014施設に21年の治療実績などを尋ね、510施設から回答を得た(回答率25%)。調査対象は、手術が必要となる骨折に絞った。一覧表は①主な手術②重度の骨折③高齢者の脆弱性骨折④大腿骨近位部骨折の早期手術の割合⑤二次骨折予防の薬物治療を受けた大腿骨近位部骨折の入院患者について件数などを示した。①は、②と③の合計数で、紙面には①が195件以上の施設(該当がない県は最多施設)を掲載した。「重度の骨折」は、専門

出すため、感染リスクが高く、治療が難しい。「脆弱性骨折」は骨粗しょう症の原因とする骨折の総称だ。歩行障害や寝たきりにつながる。高齢化の進展で増え続けている。骨が弱くなっているため、家の中でつまづくなどの軽い衝撃でも折れてしまうのが特徴だ。太もも付け根の大腿骨近位部(頸部と転子部)や、肩や手首、骨盤的な治療や高度な手術が必要な骨折だ。今回は骨盤骨折、脊椎の外傷性骨折、開放骨折を対象とした。骨盤骨折は、交通事故や高所からの転落などの強い衝撃で起こる。大出血で亡くなることもある。脊椎の外傷性骨折は、重い後遺症を招く脊髄損傷の原因となる。開放骨折は、骨が皮膚を破り露



め、家の中でつまづくなどの軽い衝撃でも折れてしまうのが特徴だ。太もも付け根の大腿骨近位部(頸部と転子部)や、肩や手首、骨盤

「大腿骨近位部」は原則手術

や脊椎に起こりやすい。なお今回、骨粗しょう症による骨盤と脊椎の骨折の手術件数は、重度の骨折の実績として計上した。肩や手首はサポーターやギプス固定で治療できることが多い。脊椎も、保存的な治療が中心だが、積極的に手術を行う施設もある。骨盤は、手術するケースも増えつつある。「大腿骨近位部骨折は、すでに寝たきりなど全身状態が悪い場合を除き原則、手術となる。保存的な治療では、歩行ができず、寝返りも打てなくなるなどして介護が必要になるからだ。治療の要は、けがから48時間以内の早期手術とリハビリ、「二次骨折(再度の骨折)」を防ぐ対策だ。早期手術は、その後の寝たきりや死亡のリスクを減らす効果が報告されている。だが、人員など体制が整わず、実施できない場合もある。今回の調査では、

大腿骨近位部骨折手術に占める早期手術の割合は、中央値で29%にとどまった。国は実施を促すため、22年4月から、75歳以上への早期手術に対する診療報酬を上乗せしている。二次骨折の予防は、入院中から実施することが望ましい。骨密度を高める薬物治療や、栄養状態の改善、転倒予防の指導を行う。骨粗しょう症は自覚症状に乏しい。ある日突然、骨折して、診断されることも珍しくない。日本骨折治療学会理事長で帝京大教授の渡部欣彦さんは「50歳以上の女性は年に1回程度は骨密度の検査を受けましょう。必要に応じて薬を服用し、食事や運動も工夫して、折れないための取り組みを、日々心がけてほしい」と呼びかけている。(久保晶子)

次回(5月17日予定)は 眼科

熊本					
済生会熊本	520	126	394	52	—
熊本赤十字	314	118	196	34	—
熊本機能	216	6	210	63	129
大分					
川島整形外科	264	7	257	39	99
アルメイダ	210	15	195	37	10
宮崎					
整形外科押領司	114	1	113	—	25
鹿児島					
米盛	807	190	617	29	32

主な医療機関の骨折治療の実績(2021年)

①主な手術(件) ②重度の骨折(件)
 ③高齢者の脆弱性骨折(件)
 ④大腿骨近位部骨折の早期手術の割合(%)
 ⑤二次骨折予防の薬物治療を受けた大腿骨近位部骨折の入院患者(人)